

## 近世初頭の朝廷における女院の役割

久保 貴子

はじめに

近世の朝廷では天皇が幼少、または女帝の場合に上皇が「院政」を行っていたことはすでに自明のこととなっているが、女院が朝廷内においてどのような役割を担っていたかについての研究はほとんど皆無である。しかし、近年研究が進められている朝廷内の機構や組織を解明するためには、女院の存在意義を追究することも必要ではないだろうか。

近世の女院は、後陽成天皇の生母新上東門院（勸修寺晴右の女、晴子）が、慶長五年（一六〇〇）十二月二十九日に女院となったことに始まり、それ以前は、天文四年（一五三五）正月十二日、後奈良天皇の生母豊楽門院（勸修寺教秀の女、藤子）が女院号を授けられた時点にまで逆上る。しかも、豊楽門院は死去にともなっていたもので、女院として生活した期間がなく、その点から言えば、文明十三年（一四八一）に女院となった後土御門天皇の生母嘉楽門院にまで逆上らなければ女院は存在しなかった。この間、社会的・政治的状况が大きく変動し、同時に朝廷の事情も変わったから、近世の女院像は文字通り、新上東門院によって形成されていた。したがって、近世の女

院を解明するためには、まず新上東門院について論究しなければならないであろう。

新上東門院については、これまでの研究史でも近世初頭の武家政権と朝廷との関わりの中で触れられてはきたが、彼女に主眼をおいたものはない。そこで本稿では、朝廷政治史の中で新上東門院の行動がどのように位置付けられるかを論究することで、近世の女院の朝廷における地位と役割について考察したい。

## 一 誠仁親王への出仕

永祿十年（一五六七）十一月二十三日、勸修寺晴右の女、晴子が正親町天皇の第一皇子である誠仁親王の御所に上がった。『言継卿記』には「上臈」とあるが、勸修寺家の家格を考えると、これは、吉野芳恵氏が指摘された当該期に存在する禁裏の上臈（上臈局）の意味ではなく、広義の意味で使われているものと思われる。なお、女房時代の晴子は「阿茶々」（阿茶局）と称された。

ところで、晴子の出仕は、勸修寺家にとっては単なる女房としてではなく、誠仁親王の側妾を兼ねる女房にすること、さらに言えば、儲君の生母となることを期待してのものであったと考えられる。というのは、勸修寺家およびその一族の万里小路家は、代々女を典侍として出仕させていたが、後奈良天皇が勸修寺家の女を生母として誕生したのに続き、正親町天皇、誠仁親王の生母も万里小路家出身で、この時期、両家は天皇外戚の地位を独占していた。当時の禁裏をみても、万里小路賢房の女の大典侍（正親町天皇の叔母にして側妾）と万里小路秀房の女の新大典侍（大典侍の姪で誠仁親王の生母）は、他の女房に比べて厚遇されている。このような状況下であったから、両家は当然、次期天皇と目される誠仁親王にも女を近侍させることにした。まず、万里小路惟房の女（伊茶と称す）が「上臈」（言継卿記）として仕えたが、晴子が出仕する一カ月余り前の十月四日に「逐電」してしまったため、

晴子は勸修寺家の期待を一身に背負つて出仕した。正親町天皇の生母榮子の呼称であつた「阿茶」を称したことからそれが窺える。その後、晴子はこの期待に応え、のちの後陽成天皇をはじめ、多くの王子女を儲けた。その上、系譜上で確認できる誠仁親王の他の側妻は冷泉為益の女のみで、しかも彼女は天正十年（一五八二）誠仁親王の許を辞して興正寺佐超に嫁いでいる。このため晴子は、これまでの天皇家と勸修寺家の特殊な関係を背景にしつつ、身分上は一女房であつたが、天皇に正配の存在しなかつた当時（誠仁親王にも正配はいない）においては、同親王の妃として独自の立場を築き始めた。そして、誠仁親王が朝廷内において発言力を増すにつれて、晴子もまた影響力を持つようになった。吉田兼見が自分や子の兼治の昇進を晴子や勸修寺一族に働きかけて実現するといった事例はそれを顕著に現している。晴子らへの働きかけは、誠仁親王の執奏を期待してのものであつた。

また、晴子所生の六宮が織田信長の猶子となり、信長の用意した二条御所に誠仁親王ともども移徙するなど、誠仁親王が信長との関係を深めたことや、父の勸修寺晴右、兄の勸修寺晴豊が相次いで伝奏の要職に就いて、信長と朝廷間の交渉や朝政に携わつたことなどから、晴子自身も信長ひいては武家政権の力を徐々に認識していったと考えられる。したがって、その後の晴子の武家政権との付き合い方はこの時期に培われた認識に根ざしていると思われる。加えて、この時代は禁裏に仕える女房衆にも政治に関わる機会があつた。たとえば、天正九年二月の信長の馬揃えの際には、禁裏（正親町天皇）から上臈局・長橋局、御方御所（誠仁親王）から阿茶局・御乳人が派遣され、三月の信長への官位推任には上臈局・長橋局が派遣されているし、翌年五月の信長への三職推任のおりには、上臈局・大御乳人が勅使として派遣されている。これらのことから、朝廷の奥向きに仕える女房衆と言えども、外界と遮断されていたわけではなく、主要な役職や地位にいる者には政治動向の情報がもたらされており、ある程度の判断力も必要とされていたことが窺える。晴子はどうした社会的土壌のもと、政治に対する自らの見識を積んだの

である。

## 二 晴子の准三宮時代

天正十年六月に信長が本能寺で討たれると、武家政権は豊臣時代へと移る。豊臣秀吉は小牧・長久手の戦後、急速に朝廷に近づき、天皇の讓位に備えて仙洞御所の造営や禁裏御料の進獻を決める。そして自らの官位も次々に昇進させていき、ついに天正十三年七月、近衛家と二条家の関白職をめぐる紛争<sup>(3)</sup>に乗じて関白に就任した。讓位の準備も着々と進めて、翌年六月三日、『御湯殿の上の日記』に「くわんしゆ寺。なかやま。なかはしめして御まいり候て。御しやういの事この月のすへらい月のはしめよりとの御あんないとて申さるゝ。御心えのよしあり」とあるように、讓位の時期を六月末か七月初めに予定したが、多少遅延しているうちに、七月二十四日、誠仁親王が病死した。急死とも言える状況であったため、秀吉政権との確執による自殺説が流れたほどであった。しかし結局、讓位は誠仁親王の第一王子和仁親王（後陽成天皇）への嫡孫承祖ということで、同年十一月七日に無事行われた。晴子はこれに伴い、同月二十日、准三宮（准后）となった。誠仁親王が皇位に就いた場合は、まだ女房のままであるはずが、誠仁親王の死によって、いわゆる東宮の一女房から一気に天皇生母（国母）の地位を得、他の女房衆とは一線を画することになる。同年十二月十六日には、近衛前久の女前子が秀吉の養女の形で、後陽成天皇の女御として入内し、天皇正配の地位に就いたが、順位としては准後の晴子の方が上であった。同十六年四月十六日、禁裏御料の進獻と公家領の配分をすませた秀吉は、禁裏の女房に対しても知行をあてがい、小袖を贈った。その内訳をみると、晴子と前子にそれぞれ領地三百石と小袖五・ししらの糸三十、大典侍・長橋局・大御乳人にそれぞれ領地百石と小袖二、他の女房衆には領地五十石であった。晴子の知行高が確認出来るのは、現在のところこれが最初で唯

一のものである。

同年五月五日、天皇に第一皇子（若宮）が誕生した。生母は大典侍を勤める中山親子（中山親綱の女）で、三年後に第二皇子も儲けている。一方、女御の前子は同十八年に第一皇女を儲けて以後、続けて皇女を出産した。このため、若宮が秀吉主導のもと儲君に定められ、文祿三年（一五九四）四月二十九日、若宮は親王宣下を受け、諱を良仁と称した。前子に皇子（三宮、のちの後水尾天皇）が誕生するのは、この二年後のことで、すでに良仁親王の皇継が内定していたためであろう、当時の公家は三宮誕生について極めて簡略に記録しているのみである。結果からいえば、秀吉によるこの儲君内定は時期尚早で、後に禍根を残すことになったが、当時の秀吉にしてみれば、北京遷都の計画上からも若宮を早々に手中に抱え込むことが得策と判断したのであろう。

文祿元年、朝鮮出兵の緒戦に勝利した秀吉は、五月、京を預かる関白秀次に宛てて二十五か条の令書を送った。この中に、俗に三國割計画と呼ばれる有名な北京遷都の計画が盛り込まれている。これによれば、二年後、つまり文祿三年を期して、天皇を北京に行幸させ、日本の帝位は皇子の若宮か、皇弟の八条殿（八条宮智仁親王）に継がせるとしている。後陽成天皇は秀吉の手によって皇位に就いていたし、その正配の前子は秀吉の養女、皇弟智仁親王も一時、秀吉の猶子になっていたから、ここで秀吉が、若宮の地位について何らかの保証をすれば、正に天皇家を丸抱えすることができたのである。計画の時期からみて、前子に皇子が誕生するのを待つてはいられなかったということではないだろうか。その後、三國割計画は挫折するが、若宮は秀吉主導のもと、着実に儲君への道を歩むことになり、先の親王宣下に続き、同五年六月二十八日には内裏の東にあった故正親町上皇（文祿二年没）の御所に移徙した。三宮の誕生はこのわずか二十日余り前のことであったが、良仁親王の旧院御所への移徙は、同親王の皇継者としての地位が揺るぎないものであることを朝廷の内外に明確にする恰好の機会となった。その後、良

仁親王に対しては年頭の札なども行われている。

ところが、慶長三年（一五九八）八月、親王の最大の庇護者であった秀吉が没すると、俄に形勢が変化した。十月に入って、突然、後陽成天皇が病を理由に讓位の意向を示したのである。この讓位問題の顛末についてはすでに先行研究があるが、不十分な点もある<sup>(4)</sup>ので、改めて事実関係を日を追って確認しておきたい。十月十八日、天皇は三伝奏（勸修寺晴豊・久我敦通・中山親綱）を呼んで、讓位の意向を前田玄以に伝えるよう命じた。知らせを受けた玄以は直ぐに参内して宮・摂家をはじめ公家衆を招集、談合した。この結果、当惑しつつも「叙慮次第」に大勢が傾いたという（『御湯殿の上の日記』）。したがって、讓位そのものにも衆議一致の支持が得られていたわけではないが、天皇が良仁親王に讓位するということであれば、あるいはこの時、讓位は敢行しえたのかもしれない。ところが、同月二十一日、天皇が皇弟智仁親王に讓位すると表明したため、事は紛糾した。同月二十三日の前関白九条兼孝の日記には、「可有御讓位旨、最前被仰出き、其砌拙者は兎角不申候、其故者雖御腦、先以御無用之儀共候間、可然といふ事候キ、只今あまつさへ、八條殿へ御位を可被参旨、於我等尤とは難申候、況儲君には、第一宮を太閤被相定候上は、此親王之御方へ可有御讓位由勅答申畢<sup>(5)</sup>」とあり、智仁親王への讓位には到底賛同できないと勅答したことがわかる。おそらく、他の摂家たちも情情的には同意見であったと推察される。一方、五大老の筆頭であった徳川家康もこの讓位には反対であった。同月二十四・二十五日の両日、山科言経を伏見に呼んで、この件の経緯の説明を受けつつ、他の大老や五奉行と連絡を取り、素早く讓位不賛同に意見を取りまとめた。翌二十六日には増田長盛と長束正家がこの意向を携えて、摂家を訪れた。同日の兼孝の日記によれば、武家方および摂家の讓位反対の最大の理由は、良仁親王を差し置いて智仁親王へ讓位するということにあった。良仁親王が儲君であることは衆目の一致するところであることに加え、智仁親王が一旦は秀吉の猶子になって関白を継ぐ予定となり、の

ちに実子の誕生によって、宮中に戻り、改めて八条殿の称号を得たという経歴の持ち主であったことが皇位を継ぐに相応しくないと判断されたのである。こうしてこの日、五大老・摂家一致で譲位を押し止める方針に決まった。

天皇がこの反対理由をいつ、どのような形で耳にしたのかは不明だが、これに関連すると思われる興味深い記事が、『義演准后日記』の十一月六日の条に見える。

御譲位之事弥治定云々、親王御方 当今皇子一宮也、中山大納言女腹也、・三宮 同皇子、近衛入道女腹、女御也、 御位相論、当今御内意三宮へトノ

御事也、雖然太閤御遺言親王御方也、旁不落居、珍事く、

天皇は三宮に譲位したい意向であるというのである。慶長三年の譲位問題の渦中に三宮が登場するのは、管見するところ、この記事のみである。時期的にみて、譲位への強い希望を持ちつつ、良仁親王へは譲位したくない天皇が智仁親王への譲位が不可能と悟って、急遽、その代替に三宮を持ち出したとしか考えられない。天皇がなぜ良仁親王の廃嫡にそれほど固執したのかは、今もって判然としないが、この時点から三宮は一躍、皇位継承者の候補としてクロージアアップされることになる。この年はとりあえず、譲位自体が時期尚早との判断に立って、十一月十八日に家康が天皇に譲位無用を申し入れ、譲位は沙汰止みとなったが、皇継者問題の決着は先送りとなった。そして二年後の十二月二十一日、三宮は親王宣下（諱は政仁）を受ける。これは事実上の儲君内定を意味し、翌六年三月五日に良仁親王が仁和寺へ入室するにおよんで公的にも決定的となった。この間の経緯は必ずしも明瞭ではないが、武家政権の動向の影響を無視しえない。

三宮の親王宣下が行われた慶長五年は関が原の戦いがあった年でもある。近年指摘されているように、徳川軍の本隊である秀忠軍の遅延のため、勝利したとは言え、豊臣方大名との妥協を余儀なくされた家康にとつて、武家政権の一元化にはなお時間を要さざるを得なかったが、家康がこの勝利によって豊臣政権の傘下から事実上抜け、新

政權樹立に向けて大きく前進したことには違いない。こうなると、家康には故秀吉の定めた若宮儲君にあえてとらわれる必要がなくなる。しかも、天皇自身が廃嫡を望み、新たに皇繼に推す三宮は女御前子の子である。武家社会においては、すでに嫡庶の順は長幼の順より重んじられていたから、三宮儲君は武家の社会通念からも受け入れやすかった。こうして、故秀吉の意向遵守に固執する五奉行派の零落と相まって、皇繼者問題は天皇の希望通りにすればよいという考え方に急速に傾いたとみられる。摂家にしても、この段階では良仁親王への同情はあったにしろ、三宮儲君に異議を唱える積極的な理由は見いだせなかったであろう。むしろ将来、このことによって天皇外戚となる近衛家を中心に賛同する空気が広がったとも考えられる。

さて、今回の讓位問題（皇繼者問題を含む）に際して、准后晴子がどのような考えを持っていたのかは、残された史料からは全く窺い知れず、この問題は全て「表」を預かる摂家ら公家衆と武家方によって処理された感がある。これは公家・武家双方の主たる考えにほとんど足並みの乱れがなかったために、晴子の意向が特に考慮される必要がなかったということの証明でもある。つまり、「表」の機構で処理できている時は、朝廷にとっての最重要問題であつても「奥」には表立った関与の機会がないということになろう。

三宮の親王宣下からまもない十二月二十九日、晴子に女院宣下が行われた。そして、翌年、良仁親王の御座所であつた故正親町上皇の御所へ移徙することになり、十一月十日に移った。次いで十二月十八日、政仁親王がそれまでの晴子のいた御所に移徙した。これによって、女院御所、親王御所が定まり、十二月からは女院御所への小番も行われた。<sup>6</sup>一方家康は関が原の戦後、禁裏御料や公家領の見直しを計り、新知の給付を決めた。『言経卿記』の慶長六年五月十六日の条に「昨日 禁中・女院悉知行了」とあるから、晴子に対しても御料が献上されたことは確認できるが、その石高は不明である。



### 三 猪熊事件

先の讓位問題では出番のなかった晴子だが、日常の細かな面ではその意見が重視される環境ができていた。たとえば、慶長三年十一月に家康の執奏によつて勅勘御免となつた山科言経は、十二月十六日、勧修寺晴豊から禁裏御番の触れを受けたが、この時、晴子の意見によつて翌年の正月から勤めることになっている。また、同八年には晴子が天皇への周易伝授について天皇が厄年かつ若年なので延引してどうかと述べ、協議の結果、延引に決したという事例<sup>7</sup>も見られる。もつとも晴子自身には、朝廷内に勢力を張ろうというような意図は持っていなかったようである。同十四年正月には隠遁を希望し、所生の皇子である照光院興意法親王・八条宮智仁親王に留められている。

そしてこの年、朝廷内で大事件が起きた。これがいわゆる猪熊事件（官女密通一件）である。公家衆と女房衆との密通は当時としてはさほど珍しいことではなく、風紀の乱れの根は深かった。例えば、晴子が出仕した永祿十年の久我通堅と目々典侍、天正八年の中院通勝と伊予局、慶長四年の久我敦通と長橋局の密通などが挙げられる。こうした場合、通常公家衆は勅勘を蒙つて逼塞あるいは出奔し、女房衆の方も宮仕を解かれていた。その後も、今回の首謀者とされた猪熊教利が同十二年に密通事件を起こして勅勘を蒙り出奔したり、同十四年正月には、長橋局が勅勘により禁裏から一時退いたりしている。ただ今回の一件は複数による密通という異常なもので、これを知つた天皇の逆鱗が極めて激しく、公武間の懸案となつていった。

取り調べは「奥」に勤仕する大御乳人（天皇の御乳人）が中心となつて行い、これに女院御所付きの少納言局などが加わつていたようである。この取り調べの様子をもつとも詳しく伝えているのは、女が女房（平内侍）として宮仕していて自らも何度か呼び出された西洞院時慶の日記（「時慶卿記」）であるが、これも断片的な状況を伝えて

いる程度で、詳細ははっきりしない。その後、密通の公家衆・女房衆が判明すると、七月四日、公家衆（七人）は解官・蟄居、女房衆（五人）は親元へ預けられ、首謀者の猪熊教利と典藥（医師）兼保頼繼は出奔した。しかし、この一件はこれで收拾するのではなく、この段階で正式に幕府に報告され、「表」の判断に委ねられることになるのである。つまり、摂家・伝奏らと幕府方によつて、事件の解明と処分が計られることになる。なお、この件は大坂方（豊臣秀頼）にも報告され、北政所などは使者を女院御所や京都所司代の許へ送つたりしている。

七月十四日、家康の使者として上京した板倉重昌から家康の意向を伝えられた京都所司代板倉勝重は伝奏衆の許へ行き、家康の内意が「曲事ノ是非ヲ糺」し、「如仰ニ可被申付旨」（天皇の勅慮次第）であることを伝えた。<sup>(8)</sup> 同月十八日には、関白近衛信尹邸に摂家や八条宮、所司代が参集して議し、同日、八条宮と信尹が女院御所に出向いて談合の結果を報告している。これによれば、「御成敗ノ様子宜様ニ上へ被申入候由」（時慶卿記）とあるから、この時点で天皇の勅慮次第にすることが公武間で確認されたと考えられる。しかし、天皇の考えと摂家・幕府方の考えとの間に格差があり、天皇が即時厳罰を希望していたため、重昌は一旦駿府に戻り、家康の判断を仰いだ。そして八月四日、再度家康の使者として重昌と大沢基宿が上京した。家康は天皇の逆鱗は尤もで、勅慮次第としながらも「<sup>(後難)</sup>こうなんもなきやうに御きうめい<sup>(糾明)</sup>かんよう<sup>(肝要)</sup>」（『御湯殿の上の日記』）と即時処罰には不賛同の姿勢を示した。この家康の意向は大沢から直に天皇に奏聞され、これに不満であつた天皇は摂家衆を参内させ談合、改めて、大沢に勅慮に変更のないことを自ら厳命した。しかしながら、その後の経緯は天皇の思いどおりには進んでいない。所司代は公家衆の尋問を所司代邸で、女房衆の尋問を勧修寺邸でそれぞれ行い、同月二十日には所司代の板倉、翌二十一日には女院の使者帥局と女御の使者右衛門督および楊林院（柳原淳光後室）の三人が駿府に向けて出発した。通説では、女院（晴子）らは天皇の意とは異なり、寛大な処置を望んだと言われ、この時の使者の役目はそれを家

康に伝え、かつ逆鱗のおさまらぬ天皇への対応策を相談するためであったと考えられている。事実、九月十九日に帥局らが帰京し、ついで二十三日に板倉が帰京すると、翌日には処分を家康に任せるとの天皇の勅詔が板倉に伝えられた。これにより、十月一日、問題の女房衆五人と御末衆五人・女嬪三人が楊林院に同行されて駿府に下り、そのまま女房衆五人と女嬪二人が伊豆の新島へ配流となった。さらにこの月、捕らえられていた猪熊教利と兼保頼継が、京で斬罪に処せられた。<sup>(9)</sup> 公家衆七人についても、十一月、幕府によって、<sup>(10)</sup> 花山院忠長が蝦夷、飛鳥井雅賢が隠岐、大炊御門頼国・中御門宗信が薩摩の硫黄島、難波宗勝が伊豆にそれぞれ配流となり、烏丸光広と徳大寺実久は配流を免れた。こうして一件は落着するが、この処分をめぐって天皇と幕府間のみならず、天皇と女院らとの間にも隔意が生じたことは、天皇を刺激し、同年十二月の讓位発言につながっていくことになり、その後影を落とした。

今回の一件は堂上と禁裏の女房との間の出来事であったため、女院御所を中心とする「奥」の取り調べで始まり、天皇の勅勘へと続く。従来であれば、ここで事件は一応の決着をみるのであるが、天皇がさらに重い処罰を希望したため、幕府の介入となった。<sup>(11)</sup> 以後、重罰を望む天皇と穏便化を計りたい摂家衆らとの不協和の中で幕府の調査が始まった。したがって、事件が「表」の範疇へと移ったのちも女院が関わるのは、一方の当事者が禁裏の女房であるという事件の性格によるが、さらに、この朝廷内の不協和に理由があるとみるべきであろう。つまり、八月四日の天皇と摂家衆との談合からも窺えるように、天皇を説得しきれない摂家の脆弱さが女院を必要としたのである。ゆえに、寛大な処置を望んだとされる女院の行動は、自らの意思であると同時に摂家ら公家衆の総意を受けてのものであったと考えられる。

#### 四 後陽成天皇の讓位

先の一件が原因で、天皇は女院・女御をはじめ公家衆との対面を避けるようになり、同年十二月、家康に讓位の内意を伝えた。家康はこれを將軍秀忠に伝えるよう答へ、朝廷は改めて幕府に伝えた。幕府からの勸慮次第との返答が朝廷にもたらされるのは、翌年二月のことであった。以後、讓位の準備が進められ、讓位の日程も三月十八日か二十一日に内々定まった。ところが、閏二月に入つて、家康は末女市姫が病死したことを理由に讓位延期を奏請した。以後、讓位に至るまでの細かな経緯についてはすでに研究があるので、ここでは、当時の女院と摂家の立場に関わる点に限定して述べたい。

同年四月、讓位を急ぐ天皇に対して、家康は七か条の「条々」(四月十八日付、武家伝奏広橋兼勝・勸修寺光豊宛て)<sup>(12)</sup>を示した。その第三条に「女院御所山中ニ御座候事、御用心如何之間、被成還御可然候、御近々ニ御座候て、万御異見尤候事」、第四条に「父子不致上洛之間、程遠候条、摂家衆被存寄儀候者、何茂談合之上、女院御所へ被申入、達而御異見可然存事」とあり、女院に対して天皇の側にあつて、万端天皇に意見をすることを望み、また、摂家衆の合議を主としつつも全て女院に報告し、その意見に聽する体制を指示した。つまり、家康は女院を單なる天皇への諫止役を越えて、朝廷の意思統一の核に据えようとしたのである。天皇はこの「条々」について一応承諾の返事をしたようであるが、これが摂家衆に披閱されたのが九月二日に至つてという有り様で、全く守られていなかった。女院にしても「条々」の内容を伝えられていたかどうか不明で、その後も八月に女御の御里御所に移ると、そのまま女院御所には戻らない状況にあつた。このため家康は、十月十二日、再度伝奏宛てに三か条の「条々」を認め、摂家衆にも書状を送つた。この「条々」の三条目には、先の「条々」の四条目の内容が繰り返されており、

摂家宛ての書状にも「以各被存寄儀、以女院御所、諸事御異見專一存候、於不被仰上者、以来申通問敷候也」とあって、女院を核とするこの方針の遵守を強く求めている。

ここに至って、ようやく事態の打開に向けて摂家衆が動き始めたが、天皇が強硬な態度（特に政仁親王の元服と讓位を同時に執行する事に固執した）を崩さなかったため、容易に進展せず、十一月、関白鷹司信房は皇弟智仁親王に天皇への諫奏を頼み、智仁親王がこれを承諾して同月二十二日、説得を試みた。天皇の返事は「なに事もあしく候間、不苦候」というもので、女院・智仁親王・摂家一同は恐懼するが、重ねて奏上したところ、「た、なきになき申候、なにとなりともにて候」との返事であった。この「なにとなりとも」を承諾の意と最終判断を下したのが女院で、天皇と幕府との決裂はここに回避された。こうして同年十二月二十三日、政仁親王の元服が行われ、翌十六年三月二十七日に無事、讓位が行われた。しかし、この間も天皇の憤懣が収まっていなかったことは、当時の公家の日記が伝えている。

ところで、四月に家康が示した七か条の「条々」が九月まで摂家に披瀝されなかったというような状況は、江戸時代全般から言えば極めて稀有なことで、慶長年間には朝廷の「表」の体制がいまだ確立されていなかったことをよく物語っている。五摂家が一般の公家衆の上に立つという認識はあるものの、朝議における指導力（特に天皇との関係）は十分ではなかったのである。猪熊事件と今回の讓位での摂家の行動はこれを裏付けているが、これら摂家の脆弱さは摂家個々の力量不足に帰する問題ではなく、南北朝以来の朝廷内の機能そのものに起因する問題であった。このため、家康は摂家合議（評議）を主軸とする「表」の機構を描きつつ、十分に機能しえなかった当時においては、当面、女院の国母としての立場を利用することで、天皇の「叡慮」に対応しようとした。その表れが今回の二つの「条々」などである。そして、このうち家康はこの二つの事件を教訓にして朝廷の規範を法度によって定

めていくことになる。<sup>(13)</sup>

さて、後陽成上皇の不満は讓位後もとけず、これは即位した後水尾天皇との不和へとつながる。不和の様子については、熊倉功夫氏の『後水尾院』に詳しいが、ここで若干の補足をおこう。熊倉氏は『慈眼大師伝記』の慶長十九年八月に天海が上皇と天皇の和睦をすすめ、上皇の逆鱗がおさまったと記されているもののあまり信用できず、ついに不和はとけなかった、と述べているが、土御門泰重の日記には、慶長二十（元和元）年三月に一度は和睦したことが記されている。

<sup>(14)</sup>  
六日晴天、御番、南禅寺伝長老参内、自其院参、予院御所へ内案仕候へと広橋大納言被申候故、予院参、長老退出以後、初夜時分まで御前ニテ予・山科御雑談アリ、当今与院御所御和睦之由院之仰ニテ初承候、珍重不浅候、四海一家兄弟タルト同シ

これによれば、金地院崇伝の仲介によって和睦が成ったと解される。同月二十一日にはこの和睦を喜慶して天皇が銀子三百枚を上皇に進上し、泰重はその「御すそわけ」として銀子一枚を拝領したというから、この時確かに和睦したのである。しかし、この和睦は長続きしなかった。このため上皇が病床にあった元和三年（一六一七）八月には、將軍秀忠の意を受けて板倉勝重がその周旋を行ったが、結果は芳しくなく、同月二十六日不和がとけぬまま上皇が没した。つまり、両者の不和は一時期好転したものの氷解するに至らなかったということになる。また、この不和に絡んで、上皇は女御前子に対しても感情を害しており、この件で勝重が女院御所に出向くという時期もあり、女院にとって心痛の日々が続いたのである。そして、元和六年二月十八日、その女院（新上東門院晴子）も没し、朝廷では「表」「奥」ともに世代交代が行われた。

おわりに

以上述べてきたように、朝幕関係が不安定、かつ朝廷内の機構がまだ十分に機能していなかった近世初頭においては、院の不在、院と禁裏との不和などもあって摂家衆としては女院を頼らざるを得ない状況が続いた。一方、幕府としても朝廷統制上、この段階では女院の存在を利用せざるを得なかったのである。したがって、新上東門院の政務への関与はこうした朝廷内外の政治的事情を背景に、いわば將軍家と摂家衆双方の要請に依えてのものであったと言えよう。次の中和門院の時期においてもなお同様の傾向がみられるが、法度の制定や、その後朝幕間が一応の安定をみたこと、後水尾院や靈元院の「院政」時代を迎えたことなどから、女院が政務に関わる機会は減っている。しかし、近世後期には再び女院の存在が重要な役割を果たす一時期がある。この時は幕府とは関わりなく朝廷が、朝廷自体に内在した政治的な問題を乗り越えるために、女院の存在を必要としたのである。この点で、新上東門院の時とは政務関与の背景が異なる。

この点については別稿に譲ることにするが、今後は院の地位と役割についての研究を合わせて行い、朝廷内の制度や公家衆の意識の时期的な変化を踏まえて、改めて近世の朝廷の実像の解明をめざしたい。

註

- (1) 吉野芳恵「室町時代の禁裏の上臈―三条冬子の生涯と職の相伝性について」(『国学院雑誌八五―二、一九八四年』)
- (2) 『兼見卿記』天正八年十一月六日の条には、兼治の昇殿が認められたことについて「勅内府入道・同黃門・若御局別而頼申相調也」と見えるし、兼見の上臈(従三位)勅許についても、同十年五月三日の条に「旧冬以来若御局・万里小路充房別而馳走也、親王御方御執奏也」と記されており、兼見が晴子等に働きかけていたことが確認できる。

(3) この紛争は、天正十三年五月、関白職を望む左大臣近衛信尹が天皇に勅許を求めて運動したのに対し、当時関白(同年二月就任)であった二条昭実がこれに応じなかったために起こった。秀吉(当時内大臣)はこの機に乗じて近衛家に働きかけ、近衛前久の猶子になって関白に就任したのである。

(4) 中村孝也『徳川家康文書の研究』(中巻、一九五九年)には、三宮のことが一切触れられていない。また、今谷明氏は天皇が三宮を皇継者に推すに至った経緯に触れておらず、この件に関する家康の姿勢についての解釈には疑問が残る(『武家と天皇—王権をめぐる相剋—一九九三年)。

(5) 九条兼孝日記は現在、所在不明のため、『徳川家康文書の研究』から引用した。

(6) 『言経卿記』によれば、女院御所小番は慶長六年十二月から行われたが、翌年三月二十六日に「夏中可有御免之由」が触れられ中断、以後の状況は不明である。

(7) 『慶長日件録』第一の慶長八年八月二十一日の条によると、この時の晴子の意見は「主上今年厄年、又御若年之處、易学可為如何哉、儒道之大事卒爾ニ御傳授、神罰如何思召間、先延引之通主上へ可被仰由御存分也」というものであった。

(8) 『時慶卿記』(内閣文庫所蔵)慶長十四年七月十四日の条。なお、板倉重昌が家康の使者として上京したことは、『御湯殿の上の日記』の同日の条で確認できる。

(9) 兼保頼継は八月二日に捕縛され、同四日、家康によって諸大名に猪熊教利の追捕が命じられ、教利は同月九州日向で捕縛された。

(10) 公家衆への流罪執行がいわゆる「武命」によって行われたことは、『孝亮宿禰記』(宮内庁書陵部所蔵)の慶長十四年十一月七・九日の条に明記されている。

(11) 今回の幕府の介入は、公家衆に対して流罪以上の重罰に処することが、天皇あるいは朝廷独自では行いえなかったことを示しており、この一件を契機に、幕府は公家衆に対する検断権の実権を掌握することになる。

(12) この「条々」の全文は、『三藐院記』に掲載されている。なお、第三条にある「女院御所山中に御座候事」というのは、晴子が長谷に逗留していることを指している。晴子は同年正月十三日、三宮の方違えを表向き理由として長谷へ赴き、そのまま御所には戻らなかった。ところで、第七条の花山院定好(忠長の弟)と松木宗澄(宗信の兄)



(13)

の召し出しの要望と七か条以外に口上で行われた烏丸光広と徳大寺実久の赦免出仕の要望について、熊倉功夫氏は『後水尾院』(一九八二年)の中で「天皇の気持をやわらげようとした幕府の配慮かもしれない」と述べているが、この要望が先の猪熊事件で厳罰を望んだ天皇の意に沿うものとは考えにくい。実際、烏丸等の出仕が叶うのは天皇譲位後の翌年四月一日のことである。

まず慶長十八年に公家衆法度が発令され、それを整備・拡大する形で二年後に禁中竝公家諸法度が発令された。

(くぼ たかこ・本学非常勤講師)